

洋画家「高橋忠弥展」が始まりました！

2月2日、杉並区役所2階区民ギャラリーでは、半世紀以上に渡り、杉並のアトリエで絵画や書、本の装丁、エッセイなど幅広く活躍をした高橋忠弥（1912～2001）さんの作品を集めた作品展が始まり、多くの来場者が訪れました。その中には、高橋さんが顧問として所属していた立教大学のサパンヌ美術クラブのメンバーも顔を見せしていました。

洋画家の高橋さんは、1912年神田で生まれ、その後、父親の転勤で北海道に転居。そして、青年期を岩手県盛岡で過ごしました。盛岡では、地元出身の宮沢賢治を敬愛し、絵画のほかに文人としての才能を磨いていきました。

そして、1940年に上京し、独立美術協会の会員として、活動を始めました。また、杉並にアトリエを持ったのも、この頃になります。また、高橋さんは1955年から10年ほどは、立教大学の美術クラブ「サパンヌ」の顧問を務め、多くの学生の指導にあたりました。1965年に、前妻を亡くし、傷心のままパリに渡りましたが、帰国後は杉並のアトリエで、活動を再開し、2001年にその生涯を閉じました。

「サパンヌ」で、高橋さんの指導を受けた松崎剛之さん（70歳）が、作品展初日の会場に姿を現しました。松崎さんは、2007年に「雪渡り」と題した高橋忠弥さんの遺作を自費出版した方です。「雪渡り」は、もともとは1945年に、高橋忠弥が、「宮沢賢治全集」に挿画・装丁を行った自家版「ゑほん雪渡り」を復刻したものです。

松崎さんは、学生時代の4年間を高橋忠弥とともに過ごし、画家としてだけでなく、文人としての物の見方などに大きな影響を受けたそうです。絵の指導と共に、大学の池袋で毎晩のように飲み歩き、杉並のアトリエにも頻りに訪ねて、様々な話をしたことを懐かしそうに話してくれました。

本日、区役所2階の区民ギャラリーで始まった「洋画家高橋忠弥展」には、「サパンヌ」（フランス語で裸のモミの木）を連想させる木をモチーフにした絵画や独特なタッチで書かれた書など50点ほどが展示され、多くの来場者でにぎわいました。展示は、13日まで。（日曜・祝日は休み。最終日は15:00終了。）



【報道機関問合せ先】

文化・交流課 TEL 3312-2111 内線3052